

最優秀賞（愛媛県人権擁護委員連合会長賞）

「私の中の差別」

宇和島市立城南中学校 3年 善家菜陽

「あの子のこと、お願いね。」いところと会う一週間前、祖母がぽつりとそう言った。まだ祖父母もいとこの両親も元気だ。けれど、その声には「いずれ来る日」のことを見つめる静かな覚悟が感じられた。しかし、私はただ黙っていることしかできなかった。そして、その言葉はずっと胸に残り続けた。

私のいところは重度の自閉症である。見た目は同年代の子と変わらないが、会話をすることはできない。

私はそんないところと中学三年生に進級する前の春休み、五年ぶりに再会した。いところは叔母と岡山県から祖父母の家へ約三日間滞在した。五年前いところと会ったとき、私は彼女とほとんどコミュニケーションをとらなかった。彼女の知能はだいたい二歳くらいで「うー、うー。」と声をあげることで感情を表す。しかし、彼女とあまり関わりのない私にとってはそれだけで喜怒哀楽などわかるはずがないと思っていた。そのため、だんだんと彼女と接することに対して面倒く

ささや不安な気持ちを抱いていくようになった。そして、今回もどのように接するか悩んでいた。

実際に会うと悩んでいた気持ちはなくなったが、やっぱりコミュニケーションをとるのは難しい。そんな中、いところなどと六人で公園へ行った。しかし、彼女は急に環境が変わると対応しきれなくなることがあり、機嫌を損ねてしまった。そのため、彼女とはあまり遊ばずに公園を後にした。そして、その後もなかなか彼女と接するタイミングを掴めずにいた。

そんなとき、叔母がある話を私たちにしてくれた。それは彼女の卒業式での出来事だった。彼女は特別支援学校の小学部に通っていた。そして、現在は中学部に通っている。彼女は普段からあまり学校に行っておらず、卒業式も参加する予定ではなかったが、急遽参加することになった。先生の協力もあり、途中まではうまくいった。しかし、退場する際彼女は急に立ち止まってしゃがんでしまった。そして、叔母は先生に声をかけられ、彼女のところへ行ったが、彼女は他の生徒が退場し終わるまでしゃがんだままだった。すると、他の生徒が退場し終わり拍手が止むと同時に、急に彼女は叔母の手を引き、歩き始めた。その後、また拍手が鳴り始めた。彼女一人のために多くの人が拍

手をくれた。彼女と叔母は温かな拍手に送られて卒業式を終えた。そんな温かな拍手に叔母は涙が止まらなかったと話してくれた。私も思わず涙が出そうになった。私は彼女に対してわからない、タイミングが掴めないからと言い訳するのはやめようと決心した。私も彼らのように当たり前前に拍手を送れるようになりたいと思うようになった。

まずは私にできることをと思い、叔母が彼女に読み聞かせをしているのを真似て、自分から彼女に読み聞かせを提案した。すると、彼女は私に図鑑を持ってきてくれた。読み聞かせといってもページをめくるだけだが、彼女は少し両手を振って喜んでいるように感じた。そしてその後、彼女は私の膝に座ってくれた。彼女は私よりも身長が高く、正直重たかったが、初めて彼女と通じ合えたような気がし、嬉しくてその重たさに心地よさを感じた。彼女に私の言葉が伝わっているのかもよくわからないが、心は通じ合うことができると実感した瞬間だった。さらに、無意識なうちに彼女に差別意識を持っていたのだと気付かされた。

どんな人でも初めは先入観や偏見をもっていることは当たり前かもしれない。しかし、そういった考えを当たり前だと思い続け、差別

を続けてはいけない。そのため、私は差別をなくすために自分自身に差別意識や偏見があることを自覚し、そういった考えを捨て、まずはその人と触れ合うことが必要だと思う。一見、困難に感じるかもしれないが、触れ合い方は自由だ。ゲームをしたり、ハイタッチをしたり相手と一緒にできることなら何でも良いと思う。触れ合うことできっと私たちは通じ合える瞬間を得ることができる。けれど、私たち人間は「考え」や「価値観」が違い、理解し合うことが困難なこともあるだろう。けれども、理解し合えなくても相手を知ろうとする行動を忘れてはならない。

また、偏見や差別に溢れた世界でも障がいのある人たちは今日も懸命に生きようとしている。私はそんな彼らの思いがあることを忘れずに生きていきたい。そして、その思いをたくさんの人に伝えたい。さらに、祖母の言葉に答えられるように家族である彼女とこれからも触れ合って、たくさんの思いや考えを知りたいと思う。彼らが一人の人間として生活できる豊かな社会になることを願い、私たちも努力していきたい。